

詩歌には大きく分けると、言葉「で」表現する・言葉「を」表現する、という二つになるように思います。皆さんはどちらがご自分に馴染むと感ずますでしょうか。この作品は、この作者はどのようなことを言葉で語りかけているだろうと、そんなことを考えながら今月は読ませていただきました。

「あんどきゃ辛かった」

と

祖父が叔父の墓石を磨く

悲しみは今日も人を照らす

さくらママ♪ 兵庫県

→悲しみを思い出すことでしか癒えない悲しみがある。支え合った人と当時を語り合う優しく穏やかな時間は、祖父にとってはもうない。しかし叔父の墓石を磨き、話しかけながら自身の心も洗っていく。「あんどきゃ」の喋り言葉の湿度に祖父の生きてきた時間を感じる。また、この作品は文字と余白の使い方が巧い。「と」、一行開けのふたつによって、位置関係や作者の心が立ち上がってくる。

寒空を白鳥が二羽翔けてゆき

私は返事を決めたのだった

高橋ちひろ 宮城県

→静寂が聴こえてくる世界観。言葉の余白から匂い立つものを感じ取るのが文学の良さのひとつであると思うが、この作品には三十一文字の前後に広がるドラマが見える。上句の景の「動」、上句から下句へ移る一拍の「静」、そして心情の描写の「動」が流れるように描かれる。二羽であることも空間の奥行きを感じさせる。

夕暮れで街が切り絵に変わってく

睫毛とかまで綺麗に切ってよ

小林奔 神奈川県

→リアルな風景が、夕暮れの光を浴びたところからパズルのようにパタパタと切り絵に変わり、遠景から徐々に作者、そして作者の睫毛とフォーカスされていく。切り絵になったことで、睫毛と頬のやわらかさが増すようだ。「変わってく」「切ってよ」の大づかみな表現が、今回は作中主体の天邪鬼な感じをよく出している。また、「切ってよ」とは誰に語りかけているのか、読み手の想像力が刺激される。「涙して再会したけど切なくて 夢なのになんか硝子越しでさ」も良い作品だった。

電車で本を広げるとびびびって
差しこむひかり 戦争をしらない
藤ほたる 神奈川県

→「びびびっ」という無機質で速度感のあるオノマトペは、生命が持つ淡いひかりをかき消してしまうような危うさを思わせる。私も含まれるているのだが、戦争を知らない世代はどんどん増えていく。作品に書かれる日常がどれほど尊く平和なものか、私たちは当たり前と信じて疑わない。だが、私たちをかき消そうとしてくるものは形をかえて現れ続ける。電車に乗って読書をしようとするそんな無防備な瞬間にも。関係がないように思えるシーンや語彙を戦争へ向かわせる巧さ。

合鍵を指先に押し当てている
中矢 温 東京都

→合鍵を渡されるような親密な関係だが、あなたがもっと欲しい、誰よりも近くにありたいという想い。指に鍵穴はないのに押し当ててしまう無意味な行動、感情や景は描かずに合鍵と作中主体のみで構成された世界に、いっそう寂しさを感じさせられる。「ビー玉を口にころがす時雨かな」「静物としての林檎を齧ります」など、身体と外側の温度、質感をそろえるのが上手な作者であると感じた。

すかあとが揺れる
吹き飛ばされて
巨大な雲の中
ひたすらに群青
風鈴 東京都

→「すかあと」が風をはらみ膨らむ様が思い浮かぶ。言葉で遊びながら表現の跳躍もしっかりとあり、勢いだけではない丁寧さが伝わる。見上げた先の空だけでなく、吹き飛ばされたスカートの中にも群青の世界が広がっていたという、爽やかなロマン。繋がりが分かりにくくやや詰めが甘い感じはあるが、「ひたすらに群青」の終わりの盛大さ、清々しさに惹かれた。意味の通る詩のみが良い詩ではない。

君からの言葉の針で編むニット
長谷川柊香 宮城県

君からの言葉で編むのではなく、「言葉の針」。君が作者に放った言葉は硬く針のように作者を傷つけた。しかし好きな気持ちを消し去ることができず、その針を掌でつつみ、ニットを

編んでいく。そのニットも、これからどんどん冷えていくであろう二人の関係のために用意しているのだ。糸は、幸せだったときの思い出。

貴方が通り雨を凌いだ傘

翌日には捨てたその傘

雪に嵐に

私と共に濡れたんです

浅葱 愛知県

→簡単に捨てられているので、ビニール傘のような安価なものだったと思われるが、淡々とした語り口とは裏腹に、「雨を凌いだ傘」「捨てたその傘」と傘のリフレインに執着を感じさせる。物には思い出が染みつく。一緒に濡れた作者の心やその時々思い出、そういったものに気付かずに傘を捨てたあなたへの執着も透けて見える。また、傘も共に濡れるという発想はありそうでないもので、生活の中から詩を掬い上げる作者の視点は鋭い。

秋夜侘ぶ一輪挿しのように星

吉富快斗 埼玉県

→下句の巧さに痺れた。一見比喻として成立しないような取り合わせだが、「星」と体言で言い切ってしまうことで生まれる説得力や、あとに続くものを想像する余韻がとても良い。夏はもちろん、春も冬も、星は一輪挿しにはならない。秋、晩秋の物悲しい空気の奥行きにのみ、一輪の花を活けることができるのだ。秋空のどこかに、花が活けられた美しい星がある。